別添資料

地域包括ケア病床の活用例

身体機能の低下した高齢者が増加することを考えれば、入院加療を必要とするものの、急性期には当てはまらない患者を受け入れる体制を確保することは重要です

急性期に当てはまらない入院医療

88歳女性　松本さん（仮名）

夫が亡くなり3年が経過した。息子夫婦は津市内で暮らしており、一人暮らしの母を案じて一緒に暮らすことを提案しているが、今も松阪市内で1人暮らしをしている。特に大きな病気を患うこともなく過ごしており、趣味の園芸にいそしむ毎日である。前日より風邪を患っていたが、朝になり38℃の発熱、全身倦怠感が強くなり動くことも辛くなったため、息子夫婦に連絡したが、まだ仕事中ですぐに駆け付けられないと言われ、かかりつけ医の診療所に行くことにした。

かかりつけ医に受診した結果、肺炎を起こしかけているとのことであった。高齢であり重篤化しかねないことや家庭環境等を考慮してもらい、松阪市内の地域包括ケア病床を中心とした病院へ紹介入院となった。

紹介された病院でも、軽度の肺炎と診断されて数日間抗生剤の投与を受け、状態が安定した後に無事退院となった。

<u>高度急性期・急性期に該当しない疾病・病状でも受入ができる入院医療体制は必要</u>

手術や急な処置が必要なほど病状が悪化していない場合であっても、高齢者は身体機能が低下しており重篤化しかねないため、病状が安定化するまでの間、身体管理のできる手厚い医療体制は必要です

急性期での治療を終えた患者さんはすぐに自宅に帰ることが難しい場合もあります。地域包括ケア病床では自宅での実際の生活を再開するための準備を進めることができます

急性期入院後の在宅に復帰するまでの入院

74歳男性　高山さん（仮名）

松阪の暮らしも40年になる。転勤してきた松阪が気に入り、退職後も生活を満喫している。
独身生活も長く、退職後も趣味である釣りを楽しんでいた。
松阪市のがん検診で胃がんの疑いがあると指摘されたので急性期病院を受診した。検査の結果、胃がんと診断されて入院して手術をすることとなった。
手術は無事に終わったが、抗がん剤での治療を継続して行ったため、入院は3ヶ月ほどとなった。
長期の臥床により筋力は衰えてしまい、何かに捉まっていないと歩くことが難しくなっていた。入院中もリハビリはしていたものの自立した生活をするには不十分な状態であったが、抗がん剤の治療が終わったことで急性期病院から地域包括ケア病床を中心とした病院に転院して、自宅で生活できるレベルまでリハビリを継続して退院となった。

胃がん
発覚

急性期病院

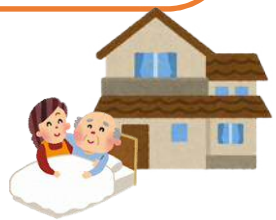
胃がんの摘出手術と手術後のリハビリを行った

リハビリを受けるために転院

地域包括ケア病床を中心とした病院

在宅に復帰できるようになるまで回復を目指す

回復後に
退院、帰宅



自宅で訪問介護を受けながらの生活に復帰

急性期病院では、手術後、早期にリハビリを始めます。
長期の入院となった場合など、自宅で生活できるようになるまで身体機能を戻すのには時間がかかることもあります。

急性期病院では手術後の抗がん剤による長期の治療やリハビリだけを受けるためには入院を続けることは難しく、リハビリを十分に行うことができない場合があります。地域包括ケア病床を中心とした病院では、リハビリを継続しながら、在宅での生活を見据えた介護サービスの利用計画なども考えながら、生活できる水準を目指して身体機能を回復させることができます。

高齢者世帯の在宅医療を一時的に支えるための機能として、地域包括ケア病床の活用が期待できます

在宅医療の一時的な入院

86歳男性　伊藤さん（仮名）

娘は結婚して大阪府で暮らしており、現在は夫婦2人での暮らしである。
85歳になる妻は、慢性の閉塞性肺疾患から心肺機能が低下し自宅で酸素療法を行っており、夫が身の回りの世話をしている。
先週、夫はかかりつけ医で定期健診を受診したところ、がんの疑いがあることがわかり、入院して精密検査を受けることを強く勧められた。
検査入院が必要となったが、娘は仕事が忙しく、帰省して妻の世話をすることが難しい状況であり、妻の介護が懸念された。そこで検査入院の期間、地域包括ケア病床を中心とした病院に妻をレスパイト入院させてもらうことになった。
検査入院の結果、がんではないことがわかり、自宅に戻った。

地域包括ケア病床を中心とした病院

夫の帰宅に合わせて退院

急性期病院

退院

<u>レスパイト入院の活用</u>

地域包括ケア病床を中心とする病院では、在宅で療養する患者さんを、同居する家族のやむをえない事情に合わせて受け入れることができます。